第 16 章　善い行い

16. 1. 善い行いとは、神がご自身の聖なる御言葉において命じられたものだけであって（ミカ 6:8、ロマ 12:2、ヘブル 13:21）、聖書の根拠なしに盲目的熱心から、また何か良い意図を口実にして（マタイ 15:9、イザヤ 29:13、Ｉペテロ 1:18、ロマ 10:2、ヨハネ 16:2、Ｉサムエル 15:21-23）人間が考案し出したもの（善い行い）ではありません。

善い行いとは、神の御言葉において命じられていること、戒めに従って守ることです。人間が恣意的に行ったことや道徳的概念での善い行いではありません。人間的観点での善い行いは外的なものですが、神の御言葉において善い行いとは、内容上から見ても、形式上から見ても善いものであるべきです。従って善い行いは、まことの信仰を持ち、神の御言葉を守ろうと労する時に出て来るものです。

ローマカトリックでの善行は人間的で、盲目的なものです。その理由は、神の御言葉が要求するより、ローマ教会が要求することに従うことを善行と見るからです。さらに彼らが捧げる礼拝は偶像的で人間が考案し出したものとして、

決して善行にはなり得ません。熱狂主義者たちが良い意図を口実に善行を熱心に見せますが、知識が欠如されている中でのことなので、決して善行にはなり得ません。放縦主義者たち（libertines)も、善行の基準が一個人にあるため善行にはなり得ません。

16. 2. 神の戒めに従順してなされるこれらの善行は、まことに生きている信仰の（ヤコブ 2:18, 22）結実と証拠です。それによって信者は感謝を表し（詩 116:12, 13、Ｉペテロ 2:9）、確信を強くし（Ｉヨハネ 2:3, 5、Ⅱペテロ 1:5-10）、兄弟の徳を立て（Ⅱコリント 9:2、マタイ 5:16）、福音の告白を美しく飾り（テトス 2:5, 9-12、Ｉテモテ 6:1）、敵対者の口を封じ（Ｉペテロ 2:15）、また神の栄光をほめたたえます（Ｉペテロ 2:12、ピリピ 1:11、ヨハネ 15:8）。彼らは神の作品で、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られました（エペソ 2:10）。それで彼らは聖潔に至る実を結び、その行き着く所は永遠の命です（ロマ 6:22）。

善行の前提条件は、聖霊の御業によって更新されて、義と認められた者であるべきです。信仰によって義と認められた者は、聖霊さまが聖なる性向を心に植えつけられている状態なので、必ず、その証拠と実が表れるようになりますが、それが善行です。救いの信仰を持つ者は、救われるべき何の行為も功労もないことを認め、救いの恵みに感謝し、戒めを守るようになります。従って信者の善行は真で、生きている信仰の結実と証拠を持ち、救いの恵みが自分にあることをすべての人々に証しします。信者の善行は、信仰の確信を強くし、兄弟の徳を立てます。また、信者の善行は、実践的敬虔として示されて、真理を反対する者たちを恥じ入るようにさせ、たとえ神を知らない者たちにまで、神の生きておられることを認めさせます。主が、救われる目的は、信者に善行が

示されるようにと、聖霊さまも個人的に善行を行うように信者を激励します。

従って、信仰によって義と認められたと言いながら、信者の行為を無視する道徳律廃棄論主義者と放縦主義者たちは誤りです。誤りの教えが、教会に入って来るようになれば、教会は敬虔の力を失うようになります。

16. 3. 善行を行える力が、決して彼ら自身から出て来るのではなく、全くキリストの霊から出て来ます（ヨハネ 15:4- 6 、エゼキエル 3:26-27）。そして彼らに善行が可能になるためには、彼らがすでに受けている恵みのほかに、御心のままに志を立てさせ事を行わせる、彼らのうちで働かれる、同じ御霊の実際的感化が必ず必要です（ピリピ 2:13, 4:13、Ⅱコリント 3:5）。しかしこの真理が、まるで聖霊の特別な御業がなければ、何の義務も行う責任がないかのように、信者を怠慢にさせたりはしません。むしろ、彼らの中にある神の恵みを活発化することに、勤勉でなければなりません（ピリピ 2:12、ヘブル 6:11, 12、Ⅱペテロ 1:3, 5, 10, 11, 、イザヤ 64:7、Ⅱテモテ 1:6、使徒 26:6, 7、ユダ 20, 21）。

信者の善行が可能なのは、彼らに救いの恵みが適用される時、聖霊さまがすでにその心に聖なる性向、あるいは、霊的習慣を形成させて置いたからです。従って新生するようになれば、必ず善い行いが出るようになります。そして、義と認められた以降は、聖霊が内住して、その霊魂を続けて聖なるものに変えるからです。勿論、新生したとしても、その霊魂に腐敗性が残存しているので、聖霊さまが続けて聖くさせる作業をなさいます。それゆえ恵みの手段の元で聖霊の感化を続けて受けることが必要です。その理由として、神が、ご自身も聖であるから、あなた方も聖でありなさいと命じているからです。私たちは聖くなるよう奮闘しなければなりません。ところが聖くなろうと労する時、私たち

に力がないことを悟って、結局、聖霊さまの助けが、必要であることを知るようになり求めるようになります。従って、まことの恵みがある者には、聖霊の助けと感化を続けて求めるようになります。

しかしペラギウス主義者は、人間の意志の力によって神の律法の要求することを行えると主張し、アルミニウス主義は、善行が聖霊の感化ではなく、神の道徳的原因と影響から来るのだと主張します。結局、彼らの主張は、善行のための聖霊の感化と影響を否定することなので、誤り等です。一方で、罪の赦しを受けた後、善行があってこそ義と認められると主張するウェスリーとパウロの新しい視点は間違った教えです。

クエーカー主義者は、聖霊さまが信者に義務を促発させない限り、善行をする必要がないと主張します。このような主張は今日も簡単に発見できます。道徳律廃棄論主義者とハイパーカルヴァン主義は、行いによってではなく、信仰によって救われたので、救い以降は、行為が必要ないと主張しますが、間違った教えです。また、熱狂主義者たちは、聖なる行為がないといっても、それは聖霊の御業によることだから、自分たちに何の責任もないと考えますが、これはひどい誤りです。

16. 4. 従順において、この世で可能な最高度に到達する人々でも、神が要求する義務以上にできることでもなく、神が要求することより、多く行ったわけでもありません。彼らは、自分たちが行うべき義務には、限りなく不足しています（ルカ 17:10、ネヘミヤ 13:22、ヨブ 9:2, 3、ガラテヤ 5:17）。

義とされた以降に、信者の行為が功労にはなりません。信者の行為は、やはり不足していて、不完全で、それを根拠にして報いを受けることもできません。

ただ神が、不足な行為を恵みによって受け入れてくださり、賞を与えるのです。

従って信者は、行いがあったと言っても、それを先立てることはできず、自分の行為を功労として主張することもできません。

ローマカトリック教会は、功労を積み上げる行為について教えていて、新生した者は、律法が要求するのを完全に行うことができると主張します。クエーカー主義は、新生した者たちの善行が、永遠の命のための功労になると主張しますが、誤りです。パウロの新しい視点では、信じた後、教会で律法を守ったのかどうかによって、義と認められると教えるので、これもやはり誤りです。

16. 5. 私たちは、自分たちの最高の行為を持ってしても、神の御手にある罪の赦しと、また永遠の命を得るほどには及びません。その理由は、私たちの最高の行為と、将来来るべき栄光との間の差は、余りにも大きくて、そして私たちと神との間は無限なる距離があるからです。私たちは、自分たちの最高の行為によって、神に益することも、過去の罪の負債を神に返すこともできません（ロマ 3:20, 4:2, 4, 6、エペソ 2:8-9、テトス 3:5-7、ロマ 8:18、詩 16:2、ヨブ 22:2-3、ヨブ 35:7-8）。私たちがなし得るすべてをなした時にも、自分の義務をなしたにすぎず、無益なしもべだからです（ルカ 17:10）。なぜなら、行為が良いものなら、それは聖霊から出たもので（ガラテヤ 5:22, 23）、私たちによってなされるものは、多くの弱点と不完全さが混じっていて、汚染されたものです。それらは、神の厳重な審判に耐えられません（イザヤ 64:6、ガラテヤ 5:17、ロマ 7:15, 18、詩 143:2、詩 130:3）。

信者の行為と聖化が不完全な理由は、心の中に相変わらず腐敗性があるからです。信者がいくら立派な善行を行ったとしても不純物が入ってあります。罪

によって汚染されているからです。従って信者の行為が、神に益を与えることもなく、神の公儀を完全に満足させられることでもないからです。私たちの行為に良いものがあるとするなら、それは私たちに帰するべきではなく、聖霊に帰するべきです。それゆえ信者が最善を尽くして善行を行ったとしても、無益なしもべがすべきことをしただけであると、告白が必ずあるべきです。時には、自分の行為を、恵みに起因してのことだと帰し、記憶すらもしてはなりません。しかし、アルミニウス主義では、赦しを受けた後に、行為が救いの根拠となるから、自分の行為を大きく考えて、それらが根拠となって傲慢に陥りやすくさせるのです。

16. 6. それにも関わらず、信者はキリストによって受け入れられているので、彼らの善行も、また、キリストにおいて受け入れられます（エペソ 1:6、Ⅰペテロ 2:5、出 28:38、創 4:4、ヘブル 11:4）。善行が受け入れられるのは、信者自身がこの世で神の御前に傷がなく責められる所がないからではなく（ヨブ 9:20、詩 143:2）、神がそれを、ご自身の御子において行為を見られ、多くの弱点や不完全さが伴っているにも関わらず（ヘブル 13:20-21、Ⅱコリント 8:12、ヘブル 6:10、マタイ 25:21, 23）、誠実な行為として受け入れてくださり、賞を与えることを喜ばれるからです。

信者の行為は功労になれませんが、キリストを通して神から認められます。キリストにおいて受け入れられるのです。キリストは私たちのために仲保なさる大祭司であり、神は、私たちの行為をキリストにあって受け入れてくださいます。これは、信者によって、善い行いをする機会を挑戦させてくれます。しかし、人間の行為に重きを置いている報い論は、間違った教えです。ただ「信者の善行に対して、神は賞を与える」と語るべきです。

16. 7. 新しく生まれていない人々の行為が、たといそれが神の命じておられる事柄で、他の人々に有益を与えることだとしても（Ⅱ列王 10:30-31、Ⅰ列王 21:27, 29、ピリピ 1:15, 16, 18）、信仰によって聖められた心から出ておらず（創 4:5、ヘブル 11:4, 6）、御言葉に従って正しい方式から行われておらず、正しい目的、つまり、神の栄光のためにしたことではないから（マタイ 6:2, 5, 16）それらは、罪深いものであり、神を喜ばせることもできなく、神から恵みを受けるに相応しい人にはなれません（ハガイ 2:14、テトス 1:15、アモス 5:21-22、ホセア 1:4、ロマ 9:16、テトス 3:5）。それでもなお、彼らが善い行いを無視することは、一層罪深く、神を不愉快にさせることです（詩 14: 4 、詩 36:3、ヨブ 21:14, 15、マタイ 25:41-43, 45、マタイ 23:23）。

新生していない者たちの行為は、人間の観点で最上に見えるとしても、それは、罪に汚染されていて、神の栄光のための目的ではなく、神の啓示された御心とは関係もないから、罪深い者たちに過ぎません。しかし教皇主義者たちは、新生していない者たちの善行が、救いのための功労になると主張します。